

被災児童たちとかかわって

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
森 知高 氏

福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター
特任教授



2011年3月11日、そのとき私は、テレビで菅首相(当時)の国会答弁を聞いていました。突然の激しい揺れでした。まさに未曾有の体験で「もういいから、いいかげんにやめて」と言いながら、食器棚の扉を押さえていました。このことが、私の退職後の生活に大きな変化をもたらすとも思わずに。

私は、福島大学人間発達文化学類で教員養成にかかわっておりましたので、まんざら福島の教育と関係がないわけではありません。震災後、直ちに立ち上がった本センターの「こども・若者支援部門長」を命ぜられ、被災児童・生徒と若者の支援をすることになりました。それが、退職3年前のことでした。それからの5年あまりの経験も未曾有のものであり、私の教育観に大きな影響を与えてきました。

ここでは、子どもたちの支援にかかわりながら得た知見を何点か述べさせていただきます。

教育的支援には「個性」「継続性」「専門性」を

震災後、たくさんの支援が福島県に集中しました。がれき撤去など力仕事の必要な人的支援もあれば、被災者を勇気づける多様なイベントによる支援もありました。今でも小・中学校には、夏休みの期間中に実施する各種の行事の案内が多数あります。

児童・生徒は多様です。それぞれの子どもが個性を持っています。また、一度きりの支援では子どもの成長は望めません。きめ細かく児童・生徒の成長を願

う支援を行うためには、その子に合った(個性)、気長な(継続性)、教育的配慮(専門性)が必要になります。

「復旧・復興」だけが支援ではない

現在まで被災地では、各方面での「復旧・復興」を目指して活動してきました。旧に復し、再び立ち上がろうと奮戦しています。教育界についても同様でした。学校を再開し、授業を震災以前に行っていたレベルに戻すことを目指してきました。また、低下が懸念される(実際、低下しましたが)学力と体力の維持・増進を図りました。いまだに帰還が困難で、元の学校での授業を再開できないところがありますが、前述した意味での教育における「復旧・復興」は図られつつあります。

しかし、教育は、単なる「復旧・復興」では不十分であることが判明しました。復旧・復興を図っている間の空白が問題なのです。この期間に達成しておかなければならないこと(発達課題)があります。教育は積み上げです。空白は、その後の積み上げを困難にします。加えて、発達課題の達成には適時性の問題があります。復旧・復興を図っている間に、適切な学習が不足した可能性があります。

空白期間の学習を埋め戻しながらの復旧・復興を図らなければなりません。

学校・地域・家庭が一体となった支援を

「生きる力」(確かな学力、豊かな心、健やかな体)の育成が教育の課題です。そのためには、学校と地域と家庭が力を合わせて取り組まなければなりません。子どもの支援も、その三者それぞれにおける教育力の向上と、その連携を図ることを目指して実施しています。

しかし、子どもは敏感です。周りの雰囲気を感じながら行動します。学校では先生の、地域では大人の、家庭では親の雰囲気を察しながら活動しています。私どもは、このことをしっかりと認識しながら協力して支援に当たらなければなりません。



故郷に想いを寄せる同窓会事業～葛尾村の部

※このコーナーは、福島の被災者と被災地域の復旧・復興を科学的・学術的見地に基づき支援している福島大学「うつくしまふくしま未来支援センター(FURE)」のスタッフによる寄稿です。
科学的データを基にした福島県の産業や環境の現状、FUREの取り組み、直面している課題などを、約20回にわたり連載し、より正確な福島県情報をお届けします。